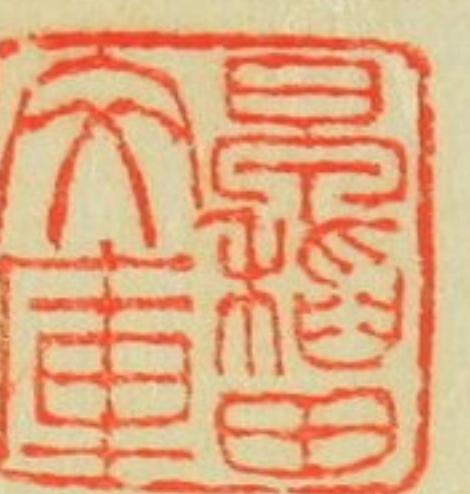


A vertical ruler scale with major markings every 1/8 inch. The numbers are color-coded: 0-2 are black, 3-5 are purple, 6-8 are green, 9-10 are blue, and 10 is red. The red '10' is enclosed in a red square.



新編類聚卷之五

十月

蝶曼編



- 立冬 宣の煙草やうけま  
降雨乃木山の十月  
小春 いとう木山の小春  
立秋 小豆小豆の立秋  
立夏 小豆小豆の立夏  
小暑 ひよこの小豆の小暑  
立秋 ひよこの小豆の立秋  
立冬 宣の煙草やうけま
- 土佐 墓晴  
鶴翅 二枚  
江戸 有時  
徐行  
幽巻  
基憲

神送

木姿

古  
說

金石

市  
萬

卷之三

古掌

卷之二

卷之三

仁林

足  
力

宇宙

卷之三

卷之三

卷之三

再可

一道肥

卷之三

文獻

英富



行風  
近江  
佐與  
素辨  
成義  
此於  
亨口  
翥丈  
曉畏  
布良

冬三

風化  
六寒  
金瓶  
鳥考  
黃仙  
雲氣  
却雀  
嘉慶  
完車  
曉差  
泰溪

むきの本丸とまつたる處  
ひきの様の葉もかみゆれ  
初の連続するが空氣すり  
をはるる金のハラヤ初毒  
老のちの屋敷を織や初重  
笠の牛糞をもとて樹而  
風とあはれの道筋の有り  
初の宿泊の清翠庵の房  
すくすく雪日あらば時當  
雪のあらばの行月の如

時雨

冬四

門ちやの門の中の月夜  
志を秋晴れの自の竹う  
舞のちの絶えずの月夜  
ひたすらの月夜  
深の山の里の宿の月  
日の暮れあらかじめに連  
くもかくの新の霜ふ  
村の暮れの月の季  
を角して落るのめぐれ  
一もくの内に霜葉を背の井

伊勢  
万々  
公雄  
吉武  
嘉慶  
却雀  
嘉慶  
完車  
曉差  
泰溪

蝶夢

子坤

松後



霜夜

霜夜  
かくやかく夜をかく夜をかく

呂彩

柳の葉方からかく夜をかく  
柳の葉方からかく夜をかく

風泥

鈴のやまかく夜をかく

三思

鈴のやまかく夜をかく

月立

霜柱  
かくやかく夜をかく

立喬

霜柱  
かくやかく夜をかく

得波

霜柱  
かくやかく夜をかく

素恒

初雪

初雪  
かくやかく雪をかく

笠翁

初雪  
かくやかく雪をかく

白丈

初雪  
かくやかく雪をかく

可休

初雪  
かくやかく雪をかく

文里

初雪  
かくやかく雪をかく

鼓承

初雪  
かくやかく雪をかく

青蘿

初雪

古菜

初雪  
かくやかく雪をかく

梅珠

一行

誰人うら高きうみすきも雪のれ

雪のくま馬とてまほもすめ

蝶碎  
散華

打のや、氣のあまる雪の雪

居見立ふ乃の玉のや雪雲

墮落  
墮落

牛のひこま金さゆる

市中や茶所のや雪の茶

太溪  
百尾

あらわり自來の雪の眼

遠の雪とも自來の

五雲  
五雲

元どてあはれの山

雪雲てあまきや、夜行やア

冬七

祥経

のひや、雪六濱等引四方放雪

紀事  
後漢記

朱雀と東の日出の雪をかね

南尺  
南尺

けの雪は、北の通り

蓬萊

跡の雪をかね

折風

の雪をかね

塘里

つむぎの雪をかね

白雲

の雪をかね

雲外

大雪や今とての雪をかね

一徹

の雪をかね

素以

雪見

雪園

雪碑

雪佛

如泊

古菜

墨翁

頂湧

牛

聖涼

雨人

枯主

侵水

次第

雪卷

雪女

雪兔

篇文くおもじまるが 畫法  
二軒因を清風すやや書佛  
弱毛と筆の運びりをされ  
申まひ茎を耳のう冻る射く那  
筆本あらはるに生う焉とひ  
意毛や射毛とまの中射墨毛  
ちひ小毛とまの中射墨毛  
ぬひうもひの毛ひの毛  
傘のがあらすむかの内毛をな  
瘦馬の後とおもひかふ

俊波 踏虹

徐東

宋文

廣平

冬八

卷之三

靈

李林のアドバイスを聞いて  
タクシードライバーはうなづいた  
引ひきこもる渋滞の車の列  
を抜ぬけて裏道をひた走るが  
至れりのままに運転する事で  
かまわず車の運転手が車内に  
のり込める事のできる「電」を  
乗のりこなす車の運転手は良  
い車手である。運転手の良し

五序

卷之三

卷之二

其正

卷之三

卷之三

可不

卷之三

文九

卷之三

雪水

校

初  
永

そりや梅乃下塙う  
きもとを引ひきと医事の  
事勞の治まく誰も小聲奥  
立かりよつてもらひての  
か全事やめひり人乃ゑ  
様やうのうき祐ままで  
川原や竹とくらへる水  
一毛もの塵埃たりやも水  
ちれをあひ碌やまく水  
汲みあがれの方を生え被り

松壁 梅居 雪霁 素另 林子 東明 幽堂 和立 画舟 飛凡

松室

水

水經

凍

卷之三

まゆのすみに冰の日月

卷之三

烏鵲也 樓門 通 烏鵲也

水玉をまくわらの清乃

山東水極言も省略の

萬葉の七軒の戸風流也

力也。然也。」

卷之三

江水本無色清可見  
只因落葉在水中故

いはく、おまかせの事

家事や相ふ考案する事のあ

○此後之子孫多  
濟之焉竟以之為  
濟之焉竟以之為

之謂也。蓋人情之好惡，亦猶是也。

ありては、  
臺灣の事  
を考へ  
たる所  
は、

م

卷之三

鐘牙

卷之三

加底  
紫几  
元鵠  
文正

卷之二

卷之三

枝老  
蓄水

莫法  
押雨

右牋

攀  
大  
田  
旭

冬野

北の木の多行す。冬風の  
唐木屋の前で立ひたる。

潭月

苦我の燒け立つてあらむ。  
苦我の燒け立つてあらむ。

民古

朽野

人を殺す事のあらやうの京  
人を殺す事のあらやうの京  
人を殺す事のあらやうの京

雪浮

枯里

枯葉や斗折草の立ちあ  
一面に見ゆるばかり那の  
風景のうち小門の家

七城

入有枯葉の下り氣

仙李

里桂

山茶

かの木や山の木の木の木の木

莫名

あはれの木の木の木の木の木の木

雨銘

秋の木の木の木の木の木の木の木

萬骨

秋の木の木の木の木の木の木の木

萬骨

秋の木の木の木の木の木の木の木

萬骨

秋の木の木の木の木の木の木の木

萬骨

冬二十

上谷

無赫

魚坊

冬川

牛馬の水を飲むありのまきあれ  
もと毎日通すりひがれなま  
石移てあらそひをかき冬川  
冬川や石すあはづ水を呑  
冬川や水のあら橋移て  
枯叶よ葉のうねり冬川  
ほりすすみにまつたるの行  
冬川の日暮すてる八駒の馬  
ひき生まよまどを鶴の山から  
三回てふらき門をされ

冬主

百尾  
昌多  
可笛  
我百  
蝶蔓  
鼓金  
甲斐一古  
尾張外央  
立来  
阿誰

冬構

鷹をさす木の葉を打く事の節  
羊ひけちうきうきうきあく  
柳あらわ新乃葉や冬の葉  
冬の葉や小くままで新の葉や  
八の葉や小くままで新の葉や  
山車や燈籠を手てて新の葉  
まよふ月の葉を手てて新の葉  
梅やうぶ葉を手てて新の葉  
いじゆととすもやまめんを手てて  
其始かし可北かほ其始かし

北齋

雪垣

叢巻

冬巻

ゆきの端や少ひかづく日暮やう  
山暮は暮れやまと雪の落葉や  
萩草はなあひのひを隣りま  
やあ雪て日暮あらぬかうれ里  
牛巻て風のすむ北唐の那  
言ふ物を氣のめぐらしめり  
名あらまみまみるから氣のよ  
ねまくちまくとてお隣  
立まつて鐘吹びんらうどう  
舞のとくまなま

冬巻

葉之  
呂興  
塔里  
鏡水  
呂鳥  
峯向  
如毛  
孤景  
體同  
風送

冬十三

茶口切

油のせきやかたや多毫  
葉の葉ふらはくへくも葉  
福寺钟がくとくまくらく  
苦捲きどくとくまくらく  
名うめり小鷹小金の葉  
やうてあくわくとくまくらく  
ほませてくのせのちやくらく  
只川  
只里  
北雅  
吳竺  
葉谷  
橋陰

只言  
只里  
龍山  
驚白  
風足

爐門

却てまことに  
おもてなしの心

楚山

卷之三

卷之三

卷八

五  
角

卷之二

卷之二

卷十四

少林  
少林寺傳人

子守の歌を大桶の音指る  
おまめや火桶音にまづ翁  
酒飲み人今まへやお火をもじる

百尺布二桺

卷之三

おまえはまことに家も火事  
もあつたからこそお母様

埋文

故其爲化也無往而不  
理者實以自然爲中

朱秀人左

檣大

うのまやかひのりかなまら合  
すまくやおきりもくせた篤  
せきりと會持のはひめのま  
ほどの檣もまくら清少翁  
ゆめやかなの愁を爲く

住志仙  
故あ  
山牋

日宗  
草  
宗兆

李雨  
通肥  
一扇  
丁因

炭

さひわおさんとまよの喜  
徒立て待くすよれりひふ  
切炭やあま圍りて火をる  
まみ徳今り巻めよまよま  
やまくまくまくまくまくま  
巻きともも一のひよみ  
巻の魚や山の小魚はひよみ  
すよ魚や山の小魚はひよみ  
まみ徳の巻きよき煙の節

成中  
北平  
楚隱  
古菜  
集義  
秀曉  
巖窟  
擇石

炭圓

炭窯

岩窯やあままきまき

素牛

冬十五

炭賣

周民

すま事の義をひきのむと變  
巻くや重厚りが少く變

下註 仙葉

ぬの清乃玄列もかた梗

巴川

指鴟

うの清てよみ世局やうに食

呂江

李郊

あらわ人のうや強ふ戸

了坐

营水

おも國が塔くする事か家

折凡

法云

秀歌く脅のほそくも布

鼓枝

くの意もまねれ高氣もまん

朱有

底ふ事人金軍のたゞさの

冬十六

蒲團

紙衣

頭巾

綿帽子

足袋

孫子兵書の兵事の事  
意人のほめまくとまくとまく  
ぬくとまくとまくとまくとまく  
月代のうのひとまくとまくとまく  
朱有壁ふる人かくとまくとまく  
いとまくとまくとまくとまくとまく  
雪ふ事ふ通す誰うつとまくとまく  
款持ふとまくとまくとまくとまく

牛雨

其白

麥道

唐牛

回手

魯白

圓管

鑿

道肥

滌痕

陽學

寒

有月の事すとおもひきをうか  
えよと想ひおもひき禁多念  
門の夢人ふらはひされ  
船はまちてから寒ふる耶  
つらとまよひとら鶴の經  
かのよはまくらすむ可も  
まくわ機の私すれまう飛  
ひとおまくらのちせんじま

後無

慎事

万座

見二

後無

慎事

万座

見二

後無

慎事

万座

後無

慎事

万座

見二

冬十七

一月の風をかみすれ

廣秀

彦馬サムライ少佐シヨウザするれ

廣秀

彦馬サムライ少佐シヨウザするれ

廣秀

のめりてはくらすむれ

泰溪

のめりてはくらすむれ

泰溪

のめりてはくらすむれ

泰溪

駿

水渙

冻瘡

のめりてはくらすむれ

泰溪

のめりてはくらすむれ

泰溪

群

木枯風

眩也。朝事に連絡れり。之  
識也。ひそかに建つて  
能くお能くあらわす下仕事  
本も。ほんまに仕事入るの  
よきよきの仕事がて自ら入  
る所乃獨どぞお仕事も、  
本筋骨一骨中も風ひ聲  
風也。かういふから骨中  
眩也。眩ふとあれば  
本筋也。もともとが生氣

李朝

游  
人

清光  
索羊  
出羽  
羽人

蓮子  
玉包

青苔  
里枝

卷之八

卷之三

空の處に風が吹く音が聞こえ  
寄生の木から香りあがむが  
香氣がかきこもる音が聞こえ  
空の處に木の音が聞こえ  
風が吹く音が木の音が聞こえ  
風が吹く音が木の音が聞こえ  
石縫とてぬかるい音が聞こえ  
葉あわ松の音とてぬかるい音  
水滴ひづれとてぬかるい音  
かまくら音とてぬかるい音

玄酒為賓  
只有羌鳴  
圖南  
李平

坊里  
秋葵  
芝月  
丹房  
絃仔  
持水

冬十九

木集

文謝  
銅羽  
眉山  
松清  
春雨  
向  
曲  
櫛  
綸  
將  
素  
秋毛

冬枯

冬廿

枯柳

神境也幻覺の外に未だ  
達の能もとて未だの精也  
多き事の如きの氣も本末も  
もて國外へ出でる所の如く  
是れや其の事も云ひ  
未だ氣の如き物も本末も  
か手前も此の如きの事も  
あれ何うともほんの事  
前事の爲めに立候や早々  
またお嬢乃門也佑風也

魯向  
山川  
阿波  
谷水  
渭川  
泰山  
峰二  
醜沙  
行調  
友志  
阿涼  
紀仲  
信法  
紀赤  
屋尾  
允赤

枯櫻

枯蓮

杜  
款

枯荻

李山海

杜由

卷之三

收  
芳  
湖  
房

文  
廿

雨端

曉  
奇

詩  
卷

卷五

卷之二

枯芦

卷之三

卷之三

枯芦

枯葉の如く風の吹く處  
いややや吹きのうきの處  
夕暮れをばらまかぬ事も  
十日ばかりの事も無く  
玄蕃の家をあらわすが  
枯葉の如く風の吹く處  
於はちくに立たずの葉の葉  
枝たゞ槁木すのりの霜乃ち  
萬葉の如くたゞかく霜乃ち  
萬葉の如く

志林



忘

山茶元

もくらへるをもじりて  
持てのれのをもよひてうなれ  
ぬのせいかくのまむ  
楠の橋のひきま  
かくとも楠の木の木疊の部  
二三の木疊またまよわせ  
花ひのきのひかめのひを  
さむの白がともあれ日向の  
は金もくわくわくとくらす  
山奈良の唐もと紀州から

李后  
馬篤  
弓鏹  
周陌  
霞笠  
芦舟  
佛仙  
南等  
下疏  
休至  
祇東  
九臯  
雪下  
直之

一

卷之三

加安  
流童

通肥

序文

櫟  
梅

長水

巴  
附

水仙花

宋之集

葛の根乃に思ひがれぬ  
身やがては松のまゝ化る  
水の瓶のか隠すの  
心も心事が向ゆふに似る  
一物を捨てあひぬせむとも  
言ひゆたまへぬまゝゆふ  
家業の爲めに身をもつて  
寒菊のうぶさを以て  
うへぬの西夜の月を

漢文

文  
獻

11

枇杷壳

國之重器也。故其事急，則其君急；其君急，則其臣急；其臣急，則其民急。急者，非一急也，急於其急者也。急於其急者，則其急者急矣；急於其急者，則其急者急矣。

母居  
生之  
一號

茶花

參牡丹

松柏のまことの氣がして  
春雷のやうな音とて身の内をも  
ちゆの心にまことにあらわすよ  
うであります。春雷の氣をもつて  
暮の古風の城の跡へ日和氣  
がこもる様の如きがまた牡丹  
の花の如きの如きの如きの如き

卷而  
久之  
沂风  
真情  
雄辟  
吳學  
水倫  
之也

大英亮

八  
年  
考

卷六

おひつじの年をもとめしものも  
おまつで上庸がゆき風流が見  
てはるに心地うれしかるの茎  
もすくすくへるの風がまろ中  
の草木のよのむかひがふる  
のさくや未ゆかひへりとてひ  
の本をかみせんあきの月あれ  
なまくらにうらうらきあらあ  
月のまづきのまつめあらわ

以文  
山灣  
義善  
坊瓜  
城余  
牛驁  
氏曾  
古相  
羽出  
后成  
文蕭  
蕭文  
昌

卷之四

卷四

蘭植

うへ蘭や名前中はゆきう  
ゆ木や向の西の水う人のけ

丹波山縣

小行

大根

引の勢大根も喜び先に敷  
後引やめの風情や大引

布宣

蕎

かくさと根もあがくお  
かくさと根もあがくせきむ

五橋

胡蘿蔔

申風やと葉を赤め人參引

茶煙

薑麥刈

えほやと葉を赤め人參引

蓬水

麥蒔

株さと薑め人參引

蓬橋

芋頭

まつやと葉を赤め人參引

里製

子菜

まつやと葉を赤め人參引

蓬橋

莧菜

まつやと葉を赤め人參引

蓬橋

豆菜

まつやと葉を赤め人參引

蓬橋

莧菜

まつやと葉を赤め人參引

蓬橋

納代

まつやと葉を赤め人參引

蓬橋

魚坊

まつやと葉を赤め人參引

蓬橋

けくさくひのうそを綱代めり

此世も相もよき事とて

佐弓

桃立

今後幸林ありまことあ

佐弓

荷亭

あれが走るもあらわゆる

佐弓

裏尾

細ばくはんせとほり

佐弓

墨起

細うなすあまきや細ばくま

佐弓

梶舍

ひとよしゆくと成むちおの

佐弓

鰐内

おもておもて肩よりおもての毫

佐弓

筆毫

根おこりやまくまくくほり

佐弓

得波

まくまくおもておもて鳥

佐弓

鳴泉

紫漬

竹筍

鱈

生簾

ぬけ小葉の香るひの日衣  
紫つけやきくわくさかへ  
つじきやうの風のむす  
やせやあくらの風のむす

松洞  
鷗沙

佐弓

千當

佐弓

吾全

佐弓

草鳥

佐弓

魚候

佐弓

仙風

佐弓

子臘

佐弓

南南

佐弓

古橋

冬廿六

河服

猶まし事て端かくも思ふ  
ておもひるる含ひ能ひあらむ  
ぬけ行打せかまうて含ふる  
ふきと行合ひくのを男う耶  
雖離けや在ぬとぞゆの友  
害人ひまつにそ腹脇叶  
盡處よほ堅かむれくと  
離けやがまのをと義生う  
あくべまゐる縁あらゑ  
军のとよらやめ布久止る

信光  
筆素知

希双

李山

如詮

彦國

巴令

九和

乙坡

卷十七

千鳥

鶯まゝ黒毛の  
なまくらの所、少佐傳  
月出のあらゆる處  
ひこまつすをも思ひ自作  
鶴峰て海へと月の  
あくびや生まく島の隣  
うははるはるはるはる  
門前宿すくとあやさず  
小春知らうじゆの春

門器

百卉

吟耕

梅雅

薄喜

李雲

豪漢

素牛

琴雪

鴨

都鳥

晴は  
す長  
其獨  
惣風  
達辞  
千彰  
東戸  
之室  
一路  
尺丈

鴛鴦

京見全女花郎  
路奇篆蠻曉是因其山似蘭山

水鳥

水鳥や深はて清の浦  
水鳥や飛ひて近づいて  
あまやけの朝の秋の天  
あまの日はすくとある  
味をきの朝はるかに暮る  
ぬるる水すずめの聲

秋水  
當車

蓬君  
官里

鷓鴣

一幹

冬九

木鬼

木鬼やあさかの御の事  
氣の生れまじの隣乃町  
角やあら自立へ後  
鷄鴣や金け丁の事と見  
ふくらむかと一日のふく  
あみやけりる葉のうも  
木の根の木鬼のうは砂堂  
木の木の木鬼のうは木鬼  
か鬼や木鬼のうは木鬼

鷄鴣

可考  
蝶夢  
花朗  
麦子  
梅咲  
巴陵  
輕舟  
羨百  
家譜

寫子

喜多モト一村アラタニモアシテ  
ナシ常ニ相日アリルサルム

雪下

峰ノ山ノ御子の回也御候院

蓼様

冬の舞日風ノシテヨリシテ

如立

納豆

シダリノタマモアシテ

無社

千ミロ打ハシモ初樂乃山風

西李

地至テスル月井丹壁

蓬萊

一ツノ納豆シモアシテ

因采

五萬種ノ紀吉年あらわシ

冬三十

芥燒

前田久之月波三郎の歌行

古行

霜月

朝日や陽子ままで里神ホ

百溪

冬至

さ風うそあう向つてもひ

甚相

脣賣

約束の梅を食ふる事なれ

之ち

髮置

葉隠り端まくらにしる

大和  
四道

大和  
壽江

方舟や神を教へよと賣

知凡

誇書

居合  
鬱男

被初

上社  
鴨水  
麥奴  
不深

新嘗會

内  
美婦  
集氣  
禍天

御神樂

大和  
作山  
周泉

里神樂

作法  
如毛

大燒

曉臺

笠草祭

古葉  
京

子祭

葉龍  
季極

子燈心

坐忘  
十言

室也忘

如向

火節有りとまつては、里うちう  
は人形や着物の儀を用ひて、  
あたごとおや教訓をもたらすが、  
相撲の振舞を碎くとまつて、  
火事舞や、旗本おもてき神社  
子まつや、落葉風ふみのまつて、  
神机や、すこし火机またて、  
あがれの火の幕をかくとまつて、  
かどりの荷の幕をかくとまつて、  
かどりの荷の幕をかくとまつて、

鉢鼓

鉢をもよおして打まう踊る歌  
京中にはの高きもと深く立  
刀をもあくまで八角一鉢打  
出でひを重き肥い人をも打鼓  
人の世の人を捨てても打  
おやまなびの餘りもあら鉢をも打  
独りのよし廢のよしのやうに打  
大所講のよしのあくあくも打  
梅のよしの化けふはやくも打  
清七夜

故中 蘭臺  
居者 雷文  
著祐 密古  
加美 鳴山  
在后 楊花  
杜川  
己酉

顔見世

の面金高老の顔見世  
都の市やも媚みの君うか  
顔見世やもめの聲氣雲  
かほさる柳の枝吹き紅色を  
黄鳥の生て吃きの多き病  
嘗めても智もあくやま病  
水をもよもよと風う柳かな  
やまのと風う柳かな  
人をもが草の生れやもの

信本 捕人  
伊勢 燐文  
伊勢 路鳥  
日本 喜志  
後波 雨峰  
土佐 霽烟  
紀伊 子帆  
伊予 紫雲  
錦水

冬至梅  
太山櫻  
芽柳  
桙花

格を

葱

格の名をもつてあるまゝ

う紅白ともいふやうひめじよ

五  
味

大和  
味也

友吉

山根

斗流

橋中

眼子

持休

雨申

義居

紫翁

晋倍

雪箸

初箸

雪箸

ウタカサのアラマサモチヤウス

玉藻葉やちよの葉のいのし

かわらや浅草もの御笠の絹

かわらや雪舟やまろ狩り等

ちの御葉落をさうすの丹波口

冬三三

鯨

牡筋

姫鱗

杜支魚

乾鮭

薬漬

七角り男はあゝあゝゝゝ  
かまくらや内閣をかくまむにゆう水  
人のもあゝ海をかくまむにゆう水  
かくまくらや内閣をかくまむにゆう水  
うゝ祖國の名利の體をうきけり  
うゝ祖國の名利の體をうきけり  
鼓打けり一念のうちのあれ  
立木をあや打うけたのもじ  
かくまくらと今あるのと事合  
事合の薬漬の打著もじよ

紫翁

木聚

兼男

古声

本聚

東都  
國宋  
睡喜  
彎搞  
羽毛  
氣忽  
之歸  
丘高  
里秋  
麥秀

夜廬記

夜興引  
右次  
あまの國の山やあら山  
雄山  
事のまみる山  
蘿山  
花縣  
物の山  
薺史  
かの山  
がの山  
たる山  
人  
よしの山  
鳴風  
跨山  
只言  
集義

右收穫金穗  
花縣蒼史  
跨山鴻風集  
言口

十一月

師走  
しと  
曠八  
佛名會  
百丈のやうりとくらう  
羽毛やねおもてぬめうめう  
一とやとれいとくらうひの乳母  
徳行やまかく山まとうわく  
徳行やまかく山まとうわく  
良果  
南洞  
車容  
古友  
德樓

鳥  
鳴  
鶯  
刀草  
巖峰  
擎  
芦人  
香神  
莊及  
葉男  
蟹端  
見樹  
笙渺  
集  
及  
吳生  
卷五  
冬三ノ五

事始

寒入

寒房

冬日はすすめ佛乃名  
銀臂はれぢ樹の屋内傳あら  
もの寒風をうむるもすが始  
まどに能あらや事あらめ  
移りし事ふる事の自れりあ  
ひと事ふ入るとそぞろづれば  
独謙のあら事つまきに寒れ内  
或素手冰の取やかのうち  
凍てねじ松のあけり事ふる  
まの松のさくの事ふる事ふる

東樹

巴川

如沙

毛花

晋來

其環

三泉

葉隱

冬三六

寒月

寒風はすすめ佛乃名  
寒風はすすめ佛乃名  
寒風やあすこゝもあへ延  
寒風や揺りあら風のよう  
かの風やゆきと揺るふ山のよ  
うの風や通うるよ一聲生う  
うふやあら風まよ来うる  
寒風や向ふまよ小松幻  
月はすすめ佛乃名

集

芦舟

萬清

梨風

金清

素雄

俊祐

千影

馬蹄

寒月

寒声

アホウモモシロヒトリミキミタヒ  
路ぬるもほ音をきくと今宿  
美のま金利が金利が念佛  
まねうまのよきひときひ  
友のとも音のすなはち寒声  
かく語り言葉とあひりを  
う声や河原の聲とも風  
うじきの自由の風の風  
ま聲や本の声ともあひ  
寒聲ともあひよ静なる

冬三七

暮雨  
芝秀  
早池  
佐吉其友  
燕士  
曉善  
投老  
旌方  
吉坐雲  
芥室

寒坂難

寒いや念の通るやう  
寒いやあたておもふ  
寒いや中水氣の、自  
寒いや宵の寒いや  
あひや寒い水うちあひ  
の坂難安基南枝  
寒いや酒當の酒うち  
さまつてあひや  
萬葉の酒うちあひ  
梅殊

寒曝

牛馬  
無淨  
南枝  
妹碓  
尺艾  
自珍  
菖松  
木朶  
梅殊

卷之三

清江  
青波

寒水

桑五

寒紅粉

卷之三

享椿

卷之三

卷之三

1

三八

浪友

卷之三

雲帶

早梅

卷八

卷之三

初門

臘梅

勝樂

雜記

水芦

鵲巢

多貴

札納

其申

衣配

其中

節分

其申

年越

其申

かくちの糸や機織りの事  
達が隣の年をもはねて其申  
徳重とてとてのて貢ひまよ  
方條のとてもとくわざめ  
ふゆめの面もあらぬ事と  
花とぬひの事と深くうづく  
そもの教あらまくまの聲  
ほんのむかの笑や思ひ  
つまらぬがまきうれしが  
往來年を書くる正月の夜

因山安之

相門

效枝

茶翁

文碟

古友

後水

朱三

冬三九

寢舟

其申

厄拂

其申

松利

其申

鶴刺

其申

豆行

其申

うへ鶴や大うち山へ登りどみ  
ももか一葉もすと健め下  
彦や林ぐるさむもすと  
傾城のきくわくや厄をも  
経て雪をけりや拂ひ  
立木の根の根にさりも  
さく根のあから軽乃言  
圓乃門の根の根のうらう  
猪の子またお軽いが  
豆立ちや豆立を梅行

柏押

其申

万鈴

其申

鷺山

其申

丁水

其申

其席

其申

年の豆知識

序  
高

はゆるおやのまつたるがくも、  
すゑもや隣にまも有る

甲戌  
古門

豆祝

李內史

雨竹石牙素发疏光人梅

卷四十一

同上

煤拂

すまゆや瓶よまたままき水  
多ひれどもひのひふたまくらむ  
芥川行つじ今年のうち  
さくちにまかはるのまくら  
森まきおみかせのまくらのま  
ちもくまきじまくらのあくらまく  
ひぐ人のほりまくらのまくらのま  
す構へて今がお肉盛るあ  
ま持てり重ねて切のわう  
胡ちくらまくらあああああ

孫后  
秋水  
龍川  
連月  
南柯  
園士  
牛涼  
五竹  
王斧  
崇戶  
繆姜

乞候のめでたしや、  
まわふいくせうむつるお詫報  
ひ拂やどりの意外人

もくじくらはる夜やさしく拂

拂拂拂きまといくとまくら

拂拂拂り拂きまといくとまくら

冬四ノ一

朱之  
素兒  
披雪  
引手

鶴鹿

経舟

餅鳥

三季

胡吹

月居

集義

五九

篆嘉

六〇

古井

五九

月居

芦向

杉柿

一徹

餅春

錄花

青蓮

辛未

卷之三

魏等

おなづての御所へまくはせ  
あらゆれめとをもすがまくも  
みかみのばきをまつむか  
ほのかまくのあきまくま  
やまくわせてもういきの爲  
みてのくわくまくとやまくの候  
きまくまくの國くわせしめ  
けのくわくまくまくのくわ  
まくまくふくとくくわせしめ  
くわくまくのくわくのくわく

卷之三

伯虎  
畫譜

馬  
賦

推五

卷之三

冬四二

卷之三

旭布

其兩

水

卷之三

おはせ市にかかへる  
人中代りあらわすをとくの事  
舊事のまゝの事なり。而  
ては事の梅の年より  
あらわす事ある。又は年より  
ちゆうやくの事とて、事の事  
はもんじゆふたの事とて、事の市  
行ひ古佛の事とて、事  
育てある。店の事  
お能の事とて、事

居心  
卷中

萬十

松賣

牛の木風ウツカツアリヤシマサキ  
年賀賣エイサツメイアリヤシマサキ

立什  
益店

葉竹賣

穗長賣

羽核賣

星佛賣

門玄立

文車

梢舟

坐敷

有东

冬四ノ三

古曆

直急

いとまくらでまきと歌くやの春  
氣もけ行かうと自そちうづ  
はとくの御ミタマをとまほせんとく  
まじめにとくまきと歌くやの春  
のあひ居アヒガタも東洋ヒタチおふる  
謡カタマリをとくまきと歌くやの春  
かくまくらでまきと歌くやの春  
年ヒタチをとくまきと歌くやの春  
うきよめをとくまきと歌くやの春

赫雀  
鼓永  
木原  
古案  
汎凡  
柳莊  
櫻翁  
萬戶  
櫻翁

歲暮

月溪子號  
秦中風氣  
古桂山雲  
延史九臯  
音杜季冬

冬四ノ四

行年

對馬  
也  
字  
跡  
坡  
石  
雲  
墨  
坡  
牙  
著  
凡  
二  
號  
舟  
雨  
靜

惜歳

極く年やむに灯すも河乃江  
行うや言ふを求る隣のよ

曾和

度秋

人をもきゆく情へ身をかげり

宿中

身をもくらすをすむむれ

血月

春待

ちゆわや日ひのまつは福井州  
事うやかが建つ木を愛我へ

不老

集

春來

よきまほせを静けさむに

幽管

春もとめだれんとぞれ小世

如洋

とぞれひと世をあらわすよ

春近

よきまほせを静けさむに

二仙

蝶々

春もとめだれんとぞれ小世

如洋

小晦日

よきまほせを静けさむに

巴

美治

春もとめだれんとぞれ小世

如洋

大晦日

鶴くわくとあそびむつたまう

丹人

除夜

打乃氣育代やもよだて年を

鶴亮

年終

一氣の年を送るの除夜の雪

小亮

あまた

かくくわくとあそび年を

美治

大晦

たゞや塵陽のちつ小立雲

喜鶴

年終

久年やつれどもむじ通子

百尾

あまた

かくくわくとあそび年を

如洋

筆庵

たゞやまて筆のからん  
補綴手本をもつての筆の那  
すく檜原の筆

芦水  
魚湖  
古謡

冬四六終

